

泥臭く 愚直な 経営理念を



佐藤 史也

SATO Fumiya

税理士法人小島会計
(北海道深川市)

経営に関して大きな選択や判断の助言を求められることがよくあるが、そんなときは「10年後、どのような会社になりたいか」と経営者に問うことにしている。

経営理念とは企業を経営するうえでの信念だが、掲げていない企業も多く、軽視される傾向にある。特に親族から事業を承継した農業者によく見られる。

その背景を想像すると、新規就業や親族外承継であれば、経営者がみずから考え抜いた末に農業の世界に飛び込んでいるから、理念を言語化できることが多い。一方、家業をなんとなく引き継ぐケースもある。なぜ経営するのか見直す機会を失っているのかもしれない。そんなときほど、経営理念をしっかりと言葉で表現する必要性が高い。

さとう ふみや

1985年北海道生まれ。2008年、地方銀行に入行し農業専門担当者として活動。20年、税理士法人小島会計に入社。北海道上川地区を中心に農業の税務・会計・経営支援を担当。

経営理念には「社会貢献」や「成長」「感動」などの華々しいワードが多いが、もっと泥臭くて、素直な言葉のほうがいいと思う。例えば「家族が食べていければよい」という人もいる。それも立派な経営理念だ。

5年後の姿を想像して、1～3年の短期経営計画を作成する。経営理念を言葉にするだけで、自然と大きな判断基準ができ、ものごとが大きく動き出すこともよくある。

「昔から農業が大嫌いでやりた



©伊東 剛

どう経営すれば安定的に家族が食べていける生活を持続できるか、理念に基づいて計画すればいい。

もっと言えば、楽しんで儲けたいというような、心の奥底にある本音を経営理念として掲げるほうが好感を持てる。「楽したい、怠けたい」と考えるのは決して悪いことではない。そのうえで、どのように楽しんで儲ける経営をするのか考えるべきだ。

例えば人を雇用して育て、自分は農作業を一切しないレベルまで持っていく。そんな将来像を描き、10年の中長期経営計画を作成し、

くない。農業せずに生活したい」という若手農業者もいる。いかにも素直で、はっきりとしたビジョンだ。その経営者は経営資源を最大限活用し、農家民泊事業を開始した。さらにはコロナ禍需要を見越して、テレワークタウンを農村で開始しようとしている。まさに経営理念を体現している好例だ。

どんな経営をしたいか、どんな人生を歩みたいかを素直に考える。飾った言葉は一切いらぬ。泥臭くて愚直な経営理念をいま一度、言葉にしてみたいかがだろうか。F



農業経営アドバイザーは農業経営者のニーズに対応し、経営への総合的的確なアドバイスを実践する専門家です。2005年、農業経営の発展に寄与することを目的に日本公庫が資格制度を創設しました。本コーナーは、上級資格である上級農業経営アドバイザーが執筆しています。